

『決定往生集』 訳註 (三) — 第五修因決定 (惣明修因・別明菩提心) —

服 部 純 啓

【抄録】

本稿は、珍海（一〇九二～一一五二）撰『決定往生集』諸本のうち現時点では最良の本文を提供すると見られる、奈良県立図書館所蔵元禄九年版本の、「修因決定」のうち「惣明修因」及び「別明菩提心」の訓読と現代語訳である。『決定往生集』の諸本については、坂上雅翁「『決定往生集』諸本攷」（『淑徳短期大学研究紀要』第二〇号、一九九一、淑徳短期大学）等を参照されたい。また、坂上「禅林寺本『決定往生集』の研究（一）」（『淑徳短期大学研究紀要』第三二～三四号、一九九三～一九九五）において禅林寺本の翻刻、訓読がなされている。

作業の過程で佛教大学、本庄良文教授にご指導を賜った。また、奈良県立図書館には、貴重な資料の閲覧、複写を許可頂き、本稿掲載に関しても格別のご配慮を賜った。御礼申し上げる次第である。今後、続編を寄稿予定である。

キーワード…珍海、『決定往生集』、修因決定、惣明修因、別明菩提心

【凡例】

一、底本（底）は奈良県立図書館所蔵、元禄九（一六九六）年版本を使用する。

一、校本には左記の資料を用いた。

●…寛文五（一六六五）年版、（※宝永七（一七一〇）年版も同じ版本であるため本稿では記載しない。）

⊕…『大正新修大藏経』第八四卷所収本

⊙…『浄土宗全書』第一五卷所収本

一、本稿は、上段から校異、訓読、現代語訳の順で掲載する。

一、訓読の本文中に元禄版（丁数、左右）を記す。

一、末尾に底本の複写を添付し、下部には丁数（○丁右、○丁左）を記載する。

- 一、註記の後に【補註】を設ける。
- 一、訓読の本文中に元禄版の（丁数・左右）を記す。
- 一、問答箇所は、現代語訳に【問】・【答】と適宜記載した。
- 一、底本に基づき旧字は改変せず訓読を行ったが、異体字は環境の許

<p>①底「總」寛浄 「惣」 ②底「念」大 「念佛」 ③底「總」寛浄 「惣」 ④底「觀經記」 浄「觀經疏」 ⑤底「麤」寛大 浄「麤」 ⑥底「井」寛 「菩薩」 ⑦底「不謗方」 大「呵謗方」</p>	<p>第五に修因決定とは、委しくするに六門有り。一には總①じて修因を明し、二には別して菩提心を明し、三には往生の正業を明し、四には修行の相を明し、五には稱名の益を明し、六つには念②の分齊を明す。</p> <p>第一に總③とは、『觀經の記④』に云く、『涅槃經』に依るに、一切の善業は、皆浄土の因なり。麤⑤要に四つ有り。一つには戒を修するを因と爲す。十惡を遠離して（三十一丁左）十善を修する等なり。二には施を修するを因と爲す。井⑥を作り、菓を種え、病に醫藥を施し、像を造り、塔を立つ^①。三には慧を修するを因と爲す。經卷を書寫し、乃至一偈を聽受し、讀誦し、他の爲に演説す。四には護法を因と爲す。正法を守護し、方等を謗⑦せず。此れ等を能く一切土の因と爲す。安樂を求めん者の、宜しく須くこれを修すべし^②（『畧鈔』）。</p>	<p>第五に修因決定とは、詳細に分けると六門ある。第一には總体的に往生の因としての修行（修因）を明らかにする。第二にはとりわけ菩提心を明らかにする。第三には往生の正業を明らかにする。第四には修行の様相を明らかにする。第五には稱名の利益を明らかにする。第六には念の數量を明らかにする。</p> <p>第一に總体的に「修因を明らかにする」とは、『浄影寺慧遠の』『觀經義疏』にいう。『涅槃經』に依ると、すべての善業はみな浄土（往生）の因である。大まかな要因が四つある。第一には戒を修めることを因とする。（これは）十惡を遠ざけて十善を修める等である。</p> <p>第二には布施を修めることを因とする。（つまり）井戸を掘り、果樹を植え、病人に菓を処方し、仏像を造立し、塔を建てる。</p> <p>第三には、智慧を修めることを因とする。經卷を書寫し、一つの偈文に至るまでを聞き、讀誦し、他の人々のために述べ説く。</p> <p>第四には、仏の教えを護ることを因とする。正しい教えを守護し、大乘經典を誹謗しない。これらをすべての浄土の（往生）の因とする。極樂を求める者は、これを修める必要がある（『略抄』）</p>
---	---	---

⑧ ⑥ 「求」 ④
「來求」

又云く、『往生論』に依るに五門を因と爲す。一には禮拜門。阿彌陀佛を稱名し、禮拜し、其の國に生ぜんと求む⑧。二には讚歎門。彌陀佛の光明・智慧、一切の功德を讚す。三には作願門。其の國に生ぜんと願じて、阿彌陀佛の所行と所成とを修す。四には觀察門。(三十二丁右) 彼の國と、及び佛菩薩の功德莊嚴とを觀察す。五には廻向門。苦の生を捨てず、所作の功德を迴して、以てこれに施し、共に彼の國に生ず③。〔略抄〕。

⑨ ⑥ 「發願」 ⑥
④ 「發願心」
⑩ ⑥ 「狹善迴求」 ④ 「使善迴求」

又云く、『觀經』の説に依りて因を明すに四有り。一には觀を修して往生す。謂く十六想觀なり。二には業を修して往生す。謂く三種の淨業なり。三には心を修して往生す。心に三種有り。一には至誠心。起行虚ならず、實心をもつて往を求む。二には深心。信樂慇至に彼の國に生ぜんと欲す。三には廻向發願⑨。淨土と及び佛の所行と所成とを趣求す。故に名づけて願と爲す。狹善迴求⑩④。故に廻向と名づく。此は是れ第三の修心往生なり。四には歸向往生。自ら(三十二丁左) 行無しと雖も、善友の爲に三寶の名字を説き、或は佛の德、二菩薩の德、及び彼の淨土の勝妙の莊嚴を歎ずるに、一心に歸向す。故に往

と。

また〔慧遠は〕いう。『往生論』に依ると、五門を因とする。第一に禮拜門。阿彌陀仏の名を称え、禮拜し、その國に往生したいと願う。第二に讚歎門。阿彌陀仏の光明・智慧〔等の〕一切の功德を讚える。第三に作願門。その國に往生しようと願って、阿彌陀仏の修行されたことと完成されたことを修める。第四には觀察門。かの極樂淨土と、仏や菩薩の功德莊嚴⑥とを觀察する。五つには廻向門。苦しむ衆生を見捨てず、自分が行った功德を回し向けて、これら〔の衆生に〕施し、共に極樂淨土に往生する〔略抄〕と。

またいう。『觀經』の説示に依って因を明らかにするのに四つある。第一には觀想を修めて往生する。すなわち十六想觀である。第二には修行(業)を修めて往生する。すなわち三種の淨業⑦である。第三には心を修めて往生する(修心往生)。心には三種ある。第一に至誠心。行を起すことが偽りではなく、真実の心によって往生を求める。第二に深心。信じ願うこと極めて深く、かの極樂淨土に往生したいと思う。第三に廻向發願心。淨土と阿彌陀仏の修行された〔德〕と、成就された〔德〕とを求める。故に名づけて「願」とする。〔自ら修めた〕善を挟んで回し向け、〔淨土を〕求める。ゆえに「回向」と名づける。以上が第三の「修心往生」である。第四に歸向往生。自らに行が無くても、善知識が自分のために三宝の名を説き、あるいは仏の德、〔觀音・勢至の〕二菩

生を得」〔畧鈔〕。

⑪底「悉得往生」〔寛底〕「悉名往生」〔12底〕
「鼓」〔浄〕「鼓」

次に歸向を結して云く、「中に於て或は念じ、或は禮し、或は歎じ、或は其の名を稱して悉く往生を得⑪⁸」〔文〕『法鼓經⑫⁹』の如き、但だ彼の方に佛有すと知りて往生の意を作せば往生を得。言ふ所の三種の淨業とは、經に云く、「彼の國に生ぜんと欲せば、まさに三福を修すべし。一には父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず、十善業を修す。二には三歸を受持し、衆戒を具足して威儀を犯せず。三には菩提心を發し、深く因果を信じ、(三十三丁右) 大乘を讀誦し、行者を勸進す。此の如きの三事を名づけて淨業と爲す」〔已上〕。初めは非凡の法、次は共二乗、後は是れ大乘不共の行なり。此に由りてまさに知るべし。若しは大、若しは小、若しは定、若しは散、若しは事、若しは理、凡そ是れ善なる者のは皆淨土の因なり。

第二に別して菩提心を明すとは、問ふ。但だ淨土に生ぜんと求むれば、便ち往生を得とやせん。要す菩提心を發すべしとやせん。

答ふ。まさに此れ決定一向答して、^⑬「要す菩提心を發して方に極樂に生ず」と云ふべし^⑬。

薩の徳、およびかの極樂淨土の勝れた莊嚴を讃嘆してくれるのに對して、一心に歸依する。ゆえに往生ができる」〔略抄〕と。

次に歸依をしめくくつていう。「その中で、念じ、あるいは礼拝し、あるいは讃嘆し、あるいはその名を称えてことごとく往生を得る」と。『法鼓經^⑫』にあるように、ただかの方角に仏がおられると知って往生の心を起せば往生ができる。「先に」述べた三種の淨業について、經にいう。「かの淨土に往生したいと思うならば、当然三福を修めるべきである。第一には父母に孝行し、師に仕え、慈心を抱いて殺生せず、十善を修める。第二には三宝に歸依し、多くの戒を具えて威儀を崩さない。第三には菩提心を發し、深く因果を信じて、大乘經典を讀誦し、修行者を勸進する。このような三つの事柄を淨業と名づける」と。第一福は凡夫とも共通な修行法、第二福は声聞乘・緣覺乘とも共通な修行法、第三福は大乘独自の修行法である。以上によって理解せよ。「大乘であれ、小乗であれ、定であれ、散であれ、事であれ、理であれ、おおよそ善なるものはみな淨土〔往生〕の因である」と。

第二に、とりわけ菩提心を明らかにするというのは、【問】問う。ただ淨土に往生したいと求めれば往生を得られるのか。必ず菩提心を發すべきであるのか。

【答】答える。これにはかならず断定的に答えて、「必ず菩提心を發してこそ極樂に往生する」というべきである。

⑬ (補註1)

⑭底「則」(寛浄)
「即」

⑮底「垂」(寛浄)
「欠く」

⑯底「宣説此人」(大)
「宣説云此人」

⑰底「已上」(寛)
「欠く」

⑱底「準」(寛大)
「准」

⑲底「註」(寛大)
「注」

故に『観經の疏』に云く、〈嘉祥〉「通じて論ずれば、三福十六種の觀、皆淨土の因なり。別しては、則⑭ち菩提心を以て業の主と爲す。餘善を縁と爲す」と云云。淨影(三十三丁左)大師、『雙卷經』に依りて、「三輩の往生、皆菩提心を發す^⑮」と云ふ。又中品の文を釋して云く、「要ず終りに垂⑮として、菩提心を發するに由りて大乘の種を種ゑ、方にすなはち生ずることを得^⑯」と。下品の文を釋して云く、「此の人、過去に曾て大乘を修す。故に『大經』の中に宣説⑯すらく、此の人菩提心を發す^⑰」と。〈已上⑰。此れ『雙卷無量壽經』を名づけて『大經』と爲す。〉此等の文に準⑱ずるに、要ず無上大菩提心を以て、其の往生の正因とするのみ。

曇鸞法師の『往生論の註⑲』に云く、「是の故に彼の安樂淨土に生ぜんと願はんの者は、要ず無上菩提心を發すべし^⑲」と。綽禪師の『安樂集』、迦才師の『淨土論』、並びに此の説に同じ。

問ふ。其の菩(三十四丁右)提心とは何の相貌か有るや。

ゆえに吉藏の『観經義疏』にいう。「全体として論じると、三福と十六種の觀想とは、みな淨土(往生)の因である。個別的にはすなわち菩提心を修行(業)の主体とする。他の善行を縁とする」云々と。淨影大師(慧遠)は『無量壽經』に依つて、「三輩の往生はみな菩提心を發す^⑮」といつてゐる。また、中品の文を解釋していう。「かならず最後臨終に菩提心を發すことによつて大乘の種を植えて、まさに往生することができる」と。〈同じく〉下品の經文を解釋していう。「この人は過去世ですでに大乘を修行してゐる。ゆえに『無量壽經』の中でこの人は菩提心を發すと説いてゐる」と。〈以上、ここでは『双卷無量壽經』を名づけて『大經』とする。〉これらの文に準じると、必ず無上大菩提心をその往生の正因とするのである。

曇鸞法師の『往生論註』にいう。「このゆえに、かの安樂淨土へ往生したいと願う者は、必ず無上菩提心を發すべきである」と。道綽禪師の『安樂集』も、迦才師の『淨土論』も、みなこの説と同様である。

【問】問う。その菩提心とはどのようなものか。

②〇底「總」寛浄
「並」

答ふ。浄影の『義章』に依るに、發菩提心に總②〇じて三種有り。中に於て最初を相發心と名づく。此にまた三有り。一には厭有爲心、二には求無爲心、三には度衆生心なり。生死の過患を知りて深く厭心を生ずるを「厭有爲」と名づけ、佛果の徳を聞きて發心趣求するを「求無爲」と名づけ、諸の衆生の、苦有りて樂無きを念じて濟度の心を發すを「度衆生心」と名づく。②

②①底「設有厭」
寛浄「設厭」

問ふ。今見る所の常没の凡夫の如きは、但だ能く五妙の境界を樂求す。何ぞ能く遠く佛の功徳に及ばんや。適ま苦を畏るる者の有れば、唯三途を怖畏す。設し五道を厭ふもの有れば②①、唯自度を求むる（三十四丁左）のみ。若し爾らば如何んが菩提心を發さんや。

答ふ。禪林云く、「人、木石に非ず。好まば自ら發心す」②②と云云。

今云く、發菩提心、甚だ得易しと爲す。所以は何ん。因縁を具するが故に。故に『法花』に云く、「佛種、縁從り起る」②③と。此れ一乘經を聞きて菩提心を發すことを明す。故に「從縁起」と云ふ。一乘

【答】答える。浄影寺慧遠の『大乘義章』に依ると、發菩提心にはまゝとめて三種ある。その中の最初のものを「相發心」と名づける。これにまた三種ある。第一に厭有爲心、第二に求無爲心、第三に度衆生心である。輪廻の苦しみを知つて、深く厭う心を生じることを「厭有爲」と名づけ、仏の果報の徳を聞いて心を發し、「覺りを」求めることを「求無爲」と名づけ、諸々の衆生に苦があるが樂がないように念じて救済の心を發することを「度衆生心」と名づける。

【問】問う。いま世間に見られるような常に迷いの境地に沈んでいる凡夫は、ただ好ましい感覺の対象を願ひ求める。どうして遠く仏の功徳に及ぼうか。たまたま苦を畏れる者があつても、ただ三途を畏怖するだけである。もし五道〔すべて〕を厭う者があつても、ただ自分が覺ることを求めるだけである。もしそうならどうして菩提心を發せようか。

【答】答える。禪林寺永觀がいう。「人間は木や石ではない。好めばおのずと發心する」云々と。

いまいう。菩提心を發すことは大變得やすい。それはどうしてか。因と縁とを具えるからである。ゆえに『法華經』にいう。「仏の種子は縁より起る」と。これは一乘經を聞いて菩提心を發すことを明らかにしている。ゆえに「縁より起る」というの

は即ち是れ一佛乘なり。佛乘は即ち是れ大乘なり。故に知んぬ。但だ能く大乘經を聞くは、必定して便ち菩提心を發すなり。

②② 底「且」大

「但」
②③ 底「則」寛淨

「即」
②④ 底「發心」寛
大淨「發」

然るに其の發心の淺深、重重なり。且く②②大分を論ずれば、則ち②③三階と爲す。一には相發心。前に已に辨ずるが如し。二には息相發心②④。前に望むるに轉た深し。三には證發心。轉た更に甚(三十五丁右)深なり。此の三に各無量の淺深有。故に『涅槃經』に四依の菩薩、八恒の佛の所とに於て菩提心を發すことを説く。云云故に知んぬ。發心の淺深無量なり。然るに此の中に於て、且く最初一念の發心を明す。

謂く十信の前の常没の位の中に、善知識に遇ひて、大乘を聞くことを得て、一念の心を發し、隨順愛樂して、適ま此の心を起すを發道心と名づけて、すなはち鄰近善趣^{②⑥}の人と名く。〈發菩提心とは『義章』^{②⑦}の中の十信の前に相發心を明す者の、是れなり。〉

即ち此れ世人の、世の非常を厭ひ、淨土を欣求する、是れ發菩提心^{②⑤}なり。故に『觀經』の中の韋提夫人は現迹凡爲り。〈此の人、實には大菩薩なり。〉惡子の縁に遇ひて(三十五丁左)娑婆の濁惡不善を厭捨して、唯西方下劣の淨土を求む。但だ此の心を以て淨土の因と爲す。

である。一乗とはすなわち一仏乘である。仏乘とはすなわち大乘である。ゆえに、「ただ大乘經を聞くことのできる人は、必ず菩提心を發す」と理解できる。

ところでその發心の淺深には多くの段階がある。とりあえず大まかな分類を述べると三段階となる。第一に相發心。前ですでに述べた通りである。第二に息相發心。前のものと比較すればさらに深い。第三に証發心。なおさらにはなだ深いのである。これらの三つにそれぞれ計り知れない淺深がある。ゆえに『涅槃經』には、四依の菩薩が、八つの恒河沙数の仏のもとにおいて菩提心を發すことを説く。云々と。ゆえに、發心の淺深は計り知れないと理解できる。けれどもこのうちでとりあえず最初(相發心^{②③})の一念の發心を明らかにする。

つまり、十信の前の常没の「凡夫の」位で、善知識に遇い、大乘「の教え」を聞くことを得て、一念の心を發して、「教えに」従い、願ひ求めてたまたまこの心を發すことを「發菩提心」と名づけ、すなわち善趣に近い人と名づける。〈發菩提心とは、『大乘義章』の中の十信の前に、相發心を説明しているのがそれである。〉すなわちこれは世間の人が、世の無常であることを厭い、淨土を願ひ求める、これが發菩提心である。ゆえに『觀經』の中の韋提希夫人は、垂迹の凡夫である。〈この人は實には大菩薩である。〉非道の息子(阿闍世)の縁に遇って、娑婆世界の濁惡不善を厭ひ捨て、ただ西方にある下劣な淨土を求める。ただこの心を淨土の因とする。

②⑥底 「六道終」
 ②⑧ 「六道上界善趣終」

大師判じて云く、「發菩提心を以て業の主と爲す^{②⑨}」と。若し爾らば但だ是れ淨土を求むれば、即ち已に發菩提心を得るなり。又若し極めて能く惡道を畏るる者のは、即ち三界を厭離すと爲す。六道終に②⑥皆諸の惡趣に退入するが故に。又淨土を樂ふを即ち佛を求むと爲す。此れ相似の道を樂求するを以ての故に。また即ち彌陀國を願求するが故なり。

菩提に三有り。謂く、法と報と應となり。故に『法華論』に「三種の佛菩提^{③①}」と名づく。今既に應身應土を想念する。即ち應佛の菩提の果を念ずるなり。菩提を念ずるが故に（三十六丁右）菩提心と名づく。

『觀經の疏』に云く、〈嘉祥〉「故に『雙卷經』に云く、『十たび菩提を念ずることを因と爲して生ずることを得』^{③②}。此の菩提の業は但だ淨土に生ずるのみに非ず。終に佛果に至る。但だ衆生、佛道の長遠なるを聞きて、崖②⑦に望みて退く^{③③}。望とは見なり。崖②⑧とは高絶なり。故に淨土の近果を示して進趣の縁と作し、淨土の因と爲す。故に經に云く、『往き易くして人無し』^{③④}と。畢竟成佛の本なるが故に。

大師（吉藏）が判定している。「發菩提心を（往生のための）修行の主体とする」と。もしそうなら、ただ淨土を求めると、とりもおさずすでに菩提心を発していることになる。またもしこの上なく惡道を畏れる者は、すなわち三界を厭い離れる人である。六道の衆生は、ついにはみな諸々の惡趣に墮ちるからである。また淨土を願うことはすなわち仏を求めることである。これは覺りに類似した境地を願い求めるからである。またすなわち彌陀國を願い求めるからである。

菩提に三つある。すなわち、法と報と應である。故に『法華論』に「三種の仏の菩提」と名づけている。いま現に応身応土を想念している。すなわち応佛の菩提という果を念じているのである。菩提を念じるから菩提心と名づける。

嘉祥大師（吉藏の）『觀經義疏』にいう。「ゆえに『無量壽經』にいう。『十たび菩提を念ずることを因として往生することができ』と。この菩提の修行を修めれば、ただ淨土に往生するのみではない。最終的には佛の覺りに至るのである。ただし衆生は、覺りへの修行が果てしなく遠いことを聞けば、崖を前にしたかのよう退く。〈望〉とは「見」である。「崖」とは高い絶壁である。ゆえに淨土という、近く感じることで果報を示して、より高い修行段階へ赴く縁とし、淨土の因とするのである。ゆえ

②⑨底「也」寛大
③①底「欠く」

經に云く、《始めて菩提心を發すに、能く無邊の生死の大海を動ず^{②⑨}》^{③⑥}と。《已上》

『雙卷』一部、十たび菩提を念ずることを因と爲すといふの文有ること無し。但し本願に云く、「至心に信樂して我が國に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、もし生ぜずば（三十六丁左）正覺を取らず^{③⑦}。」と。

③⑩底「十念無量壽」大「十念念無量壽」寛淨「十念念無量壽」寛淨「十念念無量壽」

下輩の文に云く、「一向專意乃至十念^{③⑩}無量壽佛^{③⑧}と（云云）。但だ淨土を求め、但だ彌陀を念ず。大師判じて十念の菩提と爲す^{③⑨}。然るに下輩の文にこれを具足して云く、「まさに無上菩提の心を發し、一向に意を專らにして乃至十念、無量壽佛を念^{③①}じて其の國に生ぜんと願ずべし^{④①}」（云云）。

若し十念を以て上の句に屬せば^{④②}、即ち所引の如く十たび菩提を念ずることを因と爲して生ず。此の意有りと雖も、即ち下句の「念無量壽」を以て、其の上の句の「念菩提」を成ずるが故に。故に知んぬ。但だ佛を念ずるを以て發菩提心と爲るのみ。

に經にいう。「容易に往生できるのに（往生する）人がない」と。ついには仏となる根本だからである。ゆえに經にいう。《はじめて菩提心を發せば、限りの無い生死の大海を動かすことができる^{③⑦}》と。

『無量壽經』のどこにも、「十たび菩提を念ずることを因とする」という文言は無い。ただし本願にいう。「まことの心をもつて信じ願ひ、私の國土に往生したいと欲して、最低十遍でも念じたいにも関わらず往生しないのであれば、私は仏となりません」と。『無量壽經』卷下の「下輩の文にいう。「一向專意乃至十念無量壽佛」云々と。ただ淨土を求め彌陀を念じるのである。大師（吉藏）は判定して「十たび菩提を念じる」とする。ところで下輩の文にこれらを具備させていう。「まさにこの上ない覺りの心を發し、ひたすらに心を專一にして最低十念でも阿彌陀佛を念じて、その國（極樂淨土）に往生したいと願うべきである」云々と。

もし「十念」を、その前の句に所属させれば、引用したとおり、十たび菩提を念じることを因として往生することになる。このような意味があるが、下の句の「念無量壽」によって、その上の句である「念菩提」が成り立つからである。故に仏を念じることが發菩提心となると理解できる。

③② 底 「作願佛心」 竟 「作願佛身」

問ふ。『觀經の疏』に云く、「若し慳貪に滞りて發す所の勝業は(三十七丁右)淨土に生ぜず。唯一時廣濟の心を以て、菩提心と爲す」⁽⁴²⁾と。〈云云〉鸞師の云く、「若し人、無上菩提心を發さず、但だ彼の國土の受樂無間なるを聞きて、樂の爲の故に願生するは、またまさに往生を得ざるべし。是の故に自身住持の樂を求めず、一切衆生の苦を抜かんと欲するが故にと言ふ」⁽⁴³⁾と。『安樂集』に「淨土論」に依りて云く、今、發菩提心と言ふは、正しく是れ願作佛の心^{③②}なり。願作佛の心とは即ち是れ度衆生の心なり⁽⁴⁴⁾と。

迦才云く、「若し菩提心を發さずして三界を出でて作佛を求めて、直爾^{ただ}に念佛して西方に生じて、獨り一身を善くし、苦を避け樂を逐はんと求むるは、此は是れ凡夫の念なり。(三十七丁左) また往生を得ず」⁽⁴⁵⁾。今明す所の義、利他を兼ねず。何ぞ菩提心を成就することを得んや。

答ふ。『智論』の四十一に云く、「菩薩初發心のとき、無上道を縁じて、『我れまさに作佛すべし』といふ。是れを菩提心と名づく。是の菩提心は、佛と相似す。所以は何ん。因、果に似たるが故に。是れを無等等心と名づく」⁽⁴⁶⁾と。〈云云〉

【問】問う。〔吉藏〕『觀經義疏』にいう。「例えば、欲深くむさぼりを抱えて發した勝れた行いでは淨土に往生することはできない。ただ一時に、広く世の人々を救おうとする心を、菩提心とする」云々と。曇鸞法師はいう。「もしある人が、この上ない菩提を求める心を發さず、ただかの極樂淨土の、樂しみを享受することが絶え間ないことを聞いて、樂〔を享受する〕ために往生を願い求めるときは、往生はできないだろう。このゆえに、自分のための樂を求めず、あらゆる衆生の苦を除こうとするからである」⁽⁴⁷⁾と。『安樂集』に「淨土論」に依つていう。「いま發菩提心というのは、まさしく仏となることを願い求める心である。仏となることを願い求める心とは、すなわち衆生濟度の心である。」

迦才がいう。「もし菩提心を發さずして三界を脱れ出て、仏となることを求めて、すぐさま念仏し西方に往生して、自分だけを善くして苦を避け、樂を追い求めようとするとすれば、これは凡夫の思いである。また往生することはできない」云々と。いま説明されている意味では利他を兼ねていない。どうして菩提心を成就することができようか。

【答】答える。『大智度論』の卷四十一にいう。「菩薩が初めて發心するとき、最上の覺りに心を向けて、『私はまさに仏となろう』という。これを菩提心と名づける。この菩提心は仏と類似している。それはどうしてか。因が、果に似ているからである。これを比類のない心と名づける」云々と。

若し此の文に依らば、菩提心とは、正しく是れ作佛を願求する心なり。今佛土を願するは、即ち作佛を願するなり。故に往生を願するは是れ菩提心なり。然るに『安樂集』に「願作佛の心とは、即ち度衆生の心なり⁽⁴⁷⁾」と云ふは、相成の義を顯はす。大悲心を以て佛心と爲るが故に⁽⁴⁸⁾。若し念佛する時は、即ち大(三十八丁右) 悲を念ず。

又迦才云く、「獨り一身を善くし、苦を避け、樂を逐ひ、淨土に生ぜず⁽⁴⁹⁾」とは、樂を逐求する染心の者に據りて説く。『觀經の疏』の「慳貪に滯れる業にては、淨土に生ぜず⁽⁵⁰⁾」といふが如き、其の義、一なり。今⁽³³⁾これに例せざれ。但だ初行の人は其の心麤淺にして廣濟の心を具足すること能はず。然れども淨信、大乘に隨順するを以て、一念・十念、菩提心成ず。又善趣の位⁽³⁴⁾すら三心不等にして増減有るが故に。何に況や最初相似の發心をや⁽⁵¹⁾。

又事の中に就くに、孝養に由るが故に⁽³⁵⁾廣濟の心成ず。孝順の心、轉た七世⁽³⁶⁾に至れば、また一切衆生に於て皆慈悲を生ずとす。輪迴生死は(三十八丁左) 恩有るに非ざること無きを以ての故に。又惡人、一の羊を殺す時、一切の生に於て皆殺業を成ずるが

もしこの文に依るのであれば、菩提心とはまさしく仏となることを願ひ求める心である。いま仏土を願うのは、すなわち仏となることを願うことである。ゆえに往生を願うのは、菩提心なのである。ところで、『安樂集』に「仏となることを願う心とは、すなわち衆生濟度の心である」というのは、互いが互いを成り立たせる關係をあらわす。大悲心を仏の心とするからである。仏を念じるときは、すなわち大悲を念じるのである。

また迦才がいう。「獨り自分だけを善くして苦を避け、樂を追ひ求めていては淨土に往生できない」とは、樂を追ひ求める、心が「煩惱に」染まつた者について説いている。〔吉藏〕『觀經義疏』の「欲深くむさぼりを抱えて發した行いでは淨土に往生することはできない」といつているのと意味が同じである。いまこれと混同してはならない。ただ修行を始めたばかりの人は、その心が粗末で淺く、広大な救いの心を具えることはできない。しかし、淨信が大乘に従っていることによって、一念・十念で菩提心が成就する。また善趣の位ですら、三心が等しくなく、増減があるからである。まして最初の、相似の發心においてはいうまでもない。

また事についていえば、親孝行に依ることによって広く一切衆生を救済する心が成り立つ。孝順の心は、順次に七世代(父母・祖父母等)に至れば、また一切衆生に対してみな慈悲を生じることになる。輪迴生死においては、「互いに」恩のない衆生はいないからである。また惡人が、一匹の羊を殺す時は、一切の衆生に

③③底 「今」 ④④淨
「爾」
③④底 「善趣位三心」 ④④淨 ④④淨 「善趣作三心」

③⑤底 「故廣濟」
④④淨 「故功無廣濟」

③⑥底 「七世」 ④④淨
④④淨 「七世乃

至」

③⑦底「準」(寛大)

③⑦「准」

如し。^{③⑦}一切衆生若し羊と作らば皆まさに殺すべきが故に。善を以て惡に準^{③⑦}ずるに、其の理また然るべし。一切皆父母と爲すべきが故に、若し父母に於て孝順有らば、自然に便ち廣濟の心を成ぜん。梅檀始めて萌ゆるに、即ち凌雲の勢有り。慈善纔かに發すれば、すなはち大悲の勢有り。

故に『智論』に云く、(第四十九卷)「恩を知るは、是れ大悲の本、善業を開く門なり」と。^{③⑧}

③⑧底「法華經」

③⑧「法華經」

『法華經』③⑧に云く、「漸漸に功德を積みて、大悲心を具足す」と。^{③⑨}初心の大悲、何ぞ必ずしも圓滿せんや。

『大悲經』に云く、「何をか名づけて大悲と爲る。若し専ら(三十九丁右)佛を念じて相續不斷なれば、其の命終に隨ひて定んで安樂に生ず。若し能く展轉して相勤めて念佛を行ぜしむる者は、まさに知るべし、此れ等悉く大悲を行ずる人と名づく」(「已上」)。^{③⑩}

③⑨底「禮」(寛大)

「礼」

④⑩底「法華」(大)

又經論の中の、普く衆生を攝するの文と禮^{③⑨}念とを以て合行すれば、まさに法力に由りて自然に悲を成ずべし。謂く、「願共諸衆生往生安樂國」^{④⑩}といふが如き等なり。『法華』④⑩皆成佛の教へを讀誦する、

対して皆、殺生の業を成就するようなものである。すべての衆生がもし羊となれば、皆当然殺すはずだからである。善をもって惡になぞらえても、その道理はまた同様である。すべての衆生を父母と考えるべきだからである。もし父母に対して孝行の心があれば、自然にたやすく一切の衆生を救済する心が成就するであろう。梅檀がはじめて芽を出すとき、たちまちに雲を凌ぐ勢いがある。慈悲の善がわずかでもおれば、たちまちに大悲の勢いがある。ゆえに『大智度論』にいう。(第四十九卷)「恩を知るのは、大悲の根本であり、善業を開く門である」と。

『法華經』にいう。「次第に功德を積んで、(ついに)大悲心を具える」と。初心の人の大悲が、どうして必ず完全に具わろうか。

『大悲經』にいう。「何を大悲というのか。もし専ら仏を念じて絶え間なく続ければ、その命が終る時に必ず極樂に往生する。もしよく巡り巡って、互いに勤めて念仏を修行させる者は、これらすべて大悲を修行する人と呼ぶと承知せよ」と。

また經論の中の「すべての衆生を救い取る」と説く文と、礼拝と念仏とを合わせて修行すれば、まさに教えの力によって自然に悲を成就する。つまり、「願共諸衆生往生安樂國」等という通りである。『法華經』の悉皆成仏の教えを讀誦することは、すなわ

「法花」

即ち此の正意なり。三種淨業の中の第三の淨業なり。

問ふ。唯だ無所得⁽⁵⁷⁾にして、菩提心を發して淨土に生ずるとやせん。

④①底「羣疑論」

寛大淨「群疑論」

論

④②底「大乘」寛

大淨「大乘」

④③底「名號」寛

「名号」

④④底「別故」大

「利故」

④⑤底「則」寛淨

「即」

答ふ。嘉祥の『疏』に云く、「問ふ。もし有得⁽⁵⁸⁾の因生ずるか、無得の因生ずるか。答ふ。二義皆これ有り⁽⁵⁹⁾」と〈已上〉。『群④①疑論』(三十九丁左)に云く、「問ふ。西方淨土は是れ不退の處なり⁽⁶⁰⁾。著相の凡夫、生ずることを得べからず。須く大乘④②經と『中・百論』等に依りて、無所得を學して方に生ずることを得べし。今『觀經』に依りて寶樹等及び相好身を觀じ、或は名號④③を稱する、豈に有所得に非ずや。何ぞ西方に生ずることを得ん。釋すらく、若し畢竟空⁽⁶¹⁾を悟り、諸の分別を離れば、上輩の生と爲す。凡夫在俗は廣く無所得の觀を習ふこと能はず。専ら念佛するが故にまた往生を得。九品別なるが故に④④⁽⁶²⁾」(畧鈔)。綽禪師の云く、「若し始學の者は、未だ相を破すること能はず。但だ能く相に依るに往生せずといふこと無し⁽⁶³⁾」と〈云云〉。

問ふ。『疏』に云く、「若し但だ瑠璃地觀を作すに、好淨の地を見ると、則④⑤ち(四十丁右)貪心を生ずれども、地・不地を觀ずるを以ての故に、罪を滅

ちこの真意である。三種の淨業のうち第三の淨業である。

【問】問う。ただ何事にも執着せず(無所得)、菩提心を發して淨土に往生するのか。

【答】答える。吉藏の『觀經義疏』にいう。「問う。实体に執着した修行を因として往生するのか、無執着の修行を因として往生するのか。答える。二つの解釈のいずれもある」と。『群疑論』にいう。「問う。西方淨土は不退の場所である。〔対象のさまざまな〕姿に執着する凡夫は往生することができない。大乘經典と『中論』・『百論』等に依って、無所得を學んではじめて往生できる。いま『觀經』に依って寶樹等や相好を具えた仏を觀想し、あるいは仏の御名を称えることがどうして有所得でなろうか。どうして西方〔極樂淨土〕へ往生できようか。解明する。もし畢竟空を覺つて、あらゆる分別を離れば、上輩の往生人となる。凡夫で在家の者は廣く無所得の觀を修習することはできない。専ら念佛することでもまた往生ができる。九品それぞれ別であるからである」(畧抄)と。道綽禪師がいう。「学び始めたばかりの者は、まだ対象の姿(相)を離れることができない。ただし相によって往生しないということはない」云々と。

【問】問う。「吉藏」『觀經義疏』にいう。「もしただ瑠璃地觀をなして好ましく淨らかな大地を見ると、貪りの心を生じて、地・不地を觀察することによって〔はじめて〕罪を滅することが

することを得^④」と〈云云〉。又云く、「若し慳貪を滯して發す所の勝業は淨土に生ぜず^⑤」〈云云〉。此の中の「地・不地」と云ふは、即ち中道の觀、即ち是れ無所得の義なり。若し有所得は、便ち滯貪の過あり。何ぞ復た有所得に通ずと言ふや。

答ふ。若し染汚^{④⑥}の貪及び小乗^{④⑦}心は往生を得ず。大乘^{④⑧}の有所得の因をば簡はず。若し相從して言はば、大乘^{④⑨}の初心の有所得の善は、實に是れ無所得なり。無所得の教門に依りて起るが故に、諸の大乘^{⑤⑩}教は、皆無所得を以て宗と爲すが故に。故に此の『觀經』もまた不二を以て體^{⑤⑪}と爲す。〈『疏』にこれを見る。〉

- ④⑥ 底 「染汚」 大
「染汚」
④⑦ 底 「小乘」 寛
大 淨 「小乘」
④⑧ 底 「大乘」 寛
大 淨 「大乘」
④⑨ 底 「大乘」 寛
大 淨 「大乘」
⑤⑩ 底 「大乘」 寛
大 淨 「大乘」
⑤⑪ 底 「體」 寛
「躰」

問ふ。若し爾らば、初學の(四十丁左) 凡夫、何ぞ此の業を成ぜんや。

答ふ。西方の依正、及び此の教門は、皆是れ因縁無礙^{⑤②}の二諦なり。此に依りて業を起せば、無所得を成ず。故に『觀經』に云く、「若し佛を念ずる時、

できる」云々と。またいう。「例えば欲深く貪りを抱えて發した勝れた行いでは淨土に往生することはできない」云々と。この中の「地・不地」というのは、すなわち八不中道の道理を觀ること、すなわち無所得の意味である。もし有所得ならば、すなわち貪りを滯らせるという過ちがある。どうしてまた有所得に通じるといえるようか。

【答】 答える。もし汚れた貪りを持つ者や、小乗の心の者は往生ができない。「しかし」大乘の有所得の因を排除するのではない。もし「先の、諸師達の解釈に」從つて言うならば、大乘の初心の行者の有所得の善は、實は無所得である。無所得の教門によつて起るからである。「それは」諸々の大乘の教えは、すべて無所得を宗とするからである。故にこの『觀經』もまた不二を本体とする。〈『古藏』『觀經義疏』においてこれが見られる。〉

【問】 問う。もしそうなら、初学の凡夫は、どうしてこの修行を成就することができようか。

【答】 答える。西方の依報・正報やこの教門は、すべて因縁無礙の二諦である。これに依つて修行を起すならば、無所得を成就する。ゆえに『觀經』にいう。「仏を念じる時、この心そのま

- ⑤② 底 「無礙」 寛
「碍」

<p>⑤3底「無所得正觀」(寛)⑤浄「無得正觀」</p> <p>⑤4底「大乘」(寛)</p> <p>⑤大浄「大乘」</p> <p>⑤5底「作禮」(寛)</p> <p>「作礼」</p> <p>⑤6底「冥」(寛)⑤大</p> <p>⑤浄「宣」</p> <p>⑤7底「準」(寛)⑤大</p> <p>⑤浄「准」</p>	<p>是の心是れ佛、是れ法界身なり^{⑥6}」と。〈云云〉。法界は即ち是れ無生中道なり。此の心は即ち是れ無所得正觀^{⑤3}なり。まさに知るべし。世俗の凡夫、纔かに信心を起せば大乘^{⑤4}經の無所得の教へを受けて、無所得の浄土の佛を念ず。稱名・作禮^{⑤5}、皆無得を成ず。法力に由るが故に、自然に成就す。</p> <p>故に『涅槃の義記』に云く、「法力これに熏じて、冥^{⑤6}に惑を滅せ使む^{⑥8}」と。又願力に由りて必ず成就を得。</p> <p>故に『觀經』に云く、「然るに彼の(四十二丁右)如來宿願力の故に、憶想すること有る者のは、必ず成就を得^{⑥9}」〈云云〉。</p> <p>此等の文に準^{⑤7}ずるに、世俗の行人、設ひ自ら中道の法門の文義の相を知らずとも、但だ能く佛德を念ずれば、自然に無得を成ず。梵天王の、自ら甘露を作して、而も其の味を知らざるが如く、西方の行者もまた爾なり。自ら無所得を作して、而も自らはれ無所得なることを知らず。相従すれば皆是れ無所得なりと雖も、而も世俗の人は猶ほ著相を帶す。始めを分かち終りに異すれば、また有得と名づく。二義皆有りとは即ち此の謂ひなり。</p>	<p>まが仏であり、仏の法界身である」、云々と。法界は不生不滅の中道である。この心はとらわれずに(無所得)真理を見ることである。「世俗の凡夫が、わずかでも信心を起せば、大乘經典の無所得の教えを授かり、無所得の浄土の仏を念じる。称名しても礼拝してもいずれも無所得を成就する。教えの力によって自然に成就するのである」と知るべきである。</p> <p>ゆえに「慧遠」『涅槃經義記』にいう。「教えの力がこの人に熏習されて、いつの間にか煩惱を消滅させる」と。また「阿弥陀仏の」願力によって必ず成就することができる。</p> <p>ゆえに『觀經』にいう。「しかし、かの阿弥陀如來の本願力により、「そのお姿を」觀想しようとする者は必ず成就できる」云々と。</p> <p>これらの經文に準じると、世俗の修行者は、たとえ自ら中道の教えの文言とその意味の様相を知らなくても、仏の德を念じることでできさえすれば自然に無所得を成就する。たとえば梵天王は自ら甘露を作りながら、その味を知らないが、西方の行者もまたその通りである。自ら無所得の修行を修めても、「それが」無所得であるとは知るよしもない。従ってこれらはすべて無所得であるが、世俗の人は依然として相に執着している。始まりを区別して、終わりとは異なると考えれば有所得と名づけるのである。「二つの解釈のいずれもある」とはすなわちこのことをいうのである。</p>
---	---	--

【註記】

- (1) 底本では「立テ」と表記されているが、本稿では「立ッ」と改変した。
- (2) 慧遠『観経義疏』（『大正蔵』三七、一八二頁下二六～一八三頁上五行・『浄全』五、一九一頁下一五～一九二頁上五行）
- (3) 慧遠『観経義疏』（『大正蔵』三七、一八三頁上一九～二六行・『浄全』五、一九二頁上一七～下六行）
- (4) 「狭善迴求」は『決定往生集』にのみ使用されている語であり、他の経論疏における用例は確認できない。慧遠『観経義疏』（『大正蔵』三七、一八三頁中三行・『浄全』五、一九二頁下一一行）では「挟善趣求」と説示されている。石井教道は「浄影に依らば、回向とはある善根を挟んで趣求するの意であり（挟善趣求）發願とは何ものも挟まず、唯願望する（直爾趣求）の意であると釋している。」と指摘している。（『選択集全講』、平樂寺書店、一九五九、四〇〇頁）本稿においても石井氏の見解に準じて訳を行った。
- (5) 慧遠『観経義疏』（『大正蔵』三七、一八三頁上二六～中八行・『浄全』五、一九二頁下六～一五行）
- (6) 功德莊嚴・仏・菩薩が具える功德により美しく飾られている。また、功德を具えてみずからを飾ったこと。
- (7) 西方願生者が修すべき三種の浄業。『観経』では、①孝養父母、奉事師長、慈心不殺、修十善業。②受持三帰、具足衆戒、不犯威儀。③發菩提心、深信因果、讀誦大乘、勸進行者であると説く。また善導は、第一福を世福、第二福を戒福、第三福を行福とする。
- (8) 慧遠『観経義疏』（『大正蔵』三七、一八三頁中八～九行・『浄全』五、一九二頁下一五～一六行）
- (9) 『大法鼓経』に関しては、道綽『安樂集』（『大正』四七、一七頁上・『浄全』一、七〇〇頁上）、永観『往生拾因』（『大正』八四、一〇二頁上・『浄全』一五、三九三頁下～三九四頁上）において類似する一節が説示されている。しかし『法鼓経』の典拠自体は不明。
- (10) 『観無量寿経』（『大正蔵』一二、三四一頁下八～一三行・『浄全』一、三九頁六～八行）
- (11) 不共・他と共通していないこと。
- (12) 慧遠『観経義疏』（前掲註5参照）に説かれる「自らに行が無くても、善知識が自分のために三宝の名を説き、あるいは仏の徳、〔観音・勢至の〕二菩薩の徳、およびかの極樂浄土の勝れた莊嚴を讃嘆してくれるのに対して、一心に帰依する中で、という意味であろう。」
- (13) 世親『阿毘達磨俱舍論』第五隨眼品における四種の問いの第一「応一向記」（『大正蔵』二九、一〇三頁上二七～中九頁）を参照。
- (14) 吉蔵『観経義疏』（『大正蔵』三七、一三五頁上六～八行・『浄全』五、三二八頁上九～一〇行）
- (15) 慧遠『無量寿経義疏』（『大正蔵』三七、一〇七頁下六～一〇行・『浄全』五、三六頁下一三～一六行）の取意文であろう。
- (16) 慧遠『観経義疏』（『大正蔵』三七、一八四頁中一三～一四行・『浄全』五、一九五頁上九～一〇行）
- (17) 『無量寿経』では、上輩（『大正蔵』一二、二七二頁中、二二～二三行・『浄全』一、一九頁九行）、中輩（『大正蔵』一二、二七二頁中二六行・『浄全』一、一九頁一〇～一一行）、下輩（『大正蔵』一二、二七二頁下六行・『浄全』一、一九頁一四～二〇頁一行）において「發無上菩提之心」と三輩すべてに發菩提心が説かれている。
- (18) 慧遠『観経義疏』（『大正蔵』三七、一八三頁下一三～一五行・『浄全』五、一九三頁下一一～一二行）
- (19) 曇鸞『往生論註』（『大正蔵』四〇、八四二頁上一九～二〇行・『浄全』一、二五一頁下一七～二五二頁上一行）
- (20) 底本では「樂ヲ」であるが、本稿では「樂」とした。
- (21) 慧遠『大乘義章』（『大正蔵』四四、八一〇頁上二五～二九行）『決定往生集』では、①厭有爲心、②求無爲心、③度衆生心の三種をあげている。しかし『大乘義章』では、「發三種心。一、厭有爲心。聞説生死、無常大苦深心厭離。二、求無爲心。聞説涅槃、常樂我淨深

心願求。三、念衆生心。縁諸衆生、有苦無樂決意濟拔。」とあり、①厭有爲心、②求無爲心、③念衆生心の三種を示している。

- (22) 永観『往生講式』（『大正蔵』八四、八八〇頁下一七〇―一八行・『浄全』十五、四六七頁下一二―一三行）

- (23) 『妙法蓮華經』（『大正蔵』九、九頁中九行）

- (24) 四依・四つの依りどころとなるもの。菩薩の四依とは、十地以前を初依、初地より六地を第二依、七から九の三地を第三依、第十地を第四依とする。

- (25) 『大般涅槃經』（『大正蔵』一二、六三九頁上二〇―中一四頁）

- (26) 「善趣」は、慧遠の『観經義疏』（『大正蔵』三七、一八四頁中）下・『浄全』五、一九五頁下）及び『無量寿經義疏』（『大正蔵』三七、一〇七中・『浄全』五、三六頁下）を対比することによって「菩提心を発した人」に比定できる。このことは佛教大学大学院小川法道氏の「ご教示を得た。

- (27) 慧遠『大乘義章』（『大正蔵』四四、六三六頁下一〇―一三行）

- (28) 相發心・山本啓量「大乘義章に於ける認識論的考察」（『印度學佛教學研究』第一八巻第一号、一九六九年、二二三頁）では、「相發心とは生死の過と涅槃の福利を見て、生死を棄捨し涅槃に趣向する事であり、相に随つて厭求するに名づけたのである。即ち主体を行者に、対象を涅槃に置き、方法の聞法を動機として信を生じ、聞法によつて慈悲を生ずる事とし、之を発菩提心としている。」と指摘されている。

- (29) 吉蔵『観經義疏』（『大正蔵』三七、一三五頁上七行・『浄全』五、三二八頁上九―一〇行）

- (30) 底本では「已」であるが筆者の責任において「已」と改変した。

- (31) 『妙法蓮華經論憂波提舍』（『大正蔵』二六、九頁中一一行）（『大正蔵』二六、一八頁下三行）

- (32) 底本の訓点では、「十念の菩提を因と爲して生ずることを得」となっているが、以下の議論を踏まえて読み替える。以下これに従う。

- (33) 『元禄本』（八丁左二行）を参照されたい。

- (34) 『無量寿經』（『大正蔵』一二、二七四頁中二三―二四行・『浄全』一、二四頁六行）

- (35) 珍海『三論玄疏文義要』（『大正蔵』七〇、三四九頁下八―九行）にも同じ一節が見られるが典拠不明。

- (36) 吉蔵『観經義疏』（『大正蔵』三七、二三五頁上八―一三行・『浄全』五、三二八頁上二〇―一四行）

- (37) 『無量寿經』（『大正蔵』一二、二六八頁上二六―二七行・『浄全』一、七頁一四行）

- (38) 『無量寿經』（『大正蔵』一二、二七二頁下六―七行・『浄全』一、二〇頁一行）

- (39) 吉蔵『観經義疏』（前掲註35）を参照。

- (40) 『無量寿經』（『大正蔵』一二、二七二頁六―七行・『浄全』一、一九頁一四行―二〇頁上一行）

- (41) 「當發無上菩提之心、一向專意乃至十念」で切つて、「十念」の対象を「無上菩提之心」と読むのである。

- (42) 吉蔵『観經義疏』（『大正蔵』三七、二三五頁下九―一〇行・『浄全』五、三二九頁下九―一〇行）

- (43) 曇鸞『往生論註』（『大正蔵』四〇、八四二頁上二〇―二三行・『浄全』一、二五二頁上一―三行）

- (44) 道綽『安樂集』（『大正蔵』四七、七頁下七―九行・『浄全』一、六八〇頁下二―三行）

- (45) 迦才『浄土論』（『大正蔵』四七、九一頁下一―一四行・『浄全』六、六四五頁上五―七行）

- (46) 『大智度論』（『大正蔵』二五、三六二頁下二八頁―三六三頁上二行）

- (47) 道綽『安樂集』（『大正蔵』四七、七頁下八―九行・『浄全』一六八〇頁下三行）

- (48) 『観經』（『大正蔵』一二、三四三頁下一―二行・『浄全』一、四四頁四―五行）

- (49) 迦才『浄土論』（『大正蔵』四七、九一頁下一三―一四行・『浄全』

- 六、六四五頁上六～七行)
- (50) 底本訓読では「慳貪の業に滞れば、浄土に生ぜず」であるが、底本三六丁左八行の訓読に合わせる。
- (51) 願往生心。菩提心そのものではないが、それに類似している。
- (52) 『阿毘達磨俱舍論』分別業品第四之四(『大正蔵』二九、八四頁下一八～二七行) 舟橋一哉『俱舍論の原典解明 業品』(法蔵館、一九八七、二一六頁)。
- (53) 『大智度論』(『大正蔵』二五、四一三頁下二三～二四行)
- (54) 『妙法蓮華經』(『大正蔵』九、九頁上七～八行)
- (55) 『大悲經』における典拠は不明。道綽『安樂集』(『大正蔵』四七、一七頁上一九～二二行・『浄全』一、七〇〇頁下三～六行)に同様の引文有り。
- (56) 曇鸞『讚阿弥陀仏偈』、善導『法事讃』、『往生礼讃』、迦才『浄土論』等に散見される。
- (57) 無所得…なにもものにとられず、求めようとする心がないこと。執着しない境地(水野弘元『仏教用語の基礎知識』、春秋社、一九七二、一五〇頁)。
- (58) 有所得…取捨選択して執着すること。
- (59) 吉蔵『観經義疏』(『大正蔵』三七、二三五頁上一三～一四行・『浄全』五、三二八頁上一四～一五行)
- (60) 源信『往生要集』(『大正蔵』八四、八〇頁下一四～二三行・『浄全』一五、一三七頁上一六～下七行)に当該箇所あり。
- (61) 畢竟空…一切の現象を空とした究極の空。
- (62) 懷感『釈浄土群疑論』(『大正蔵』四七、三六頁中二～一一行・『浄全』六、一七頁上一〇～下一行)
- (63) 道綽『安樂集』(『大正蔵』四七、一一頁中一三～一四行・『浄全』一、六八八頁上一二～二三行)
- (64) 吉蔵『観經義疏』(『大正蔵』三七、二四三頁上三～四行・『浄全』五、三四五頁下三～四行)
- (65) 吉蔵『観經義疏』(『大正蔵』三七、二三五頁下九行・『浄全』五、三二九頁下九行)
- (66) 『観無量寿經』(『大正蔵』一一、三四三頁上一八～二二行・『浄全』一、四三頁二～四行)
- (67) 底本では「受」となっているが主語が「世俗凡夫」となっていることから、文章のつながりを考慮し「受_テ」と改めた。
- (68) 慧遠『大般涅槃經義記』(『大正蔵』三七、七一四頁中一八～三二行)
- (69) 『観無量寿經』(『大正蔵』一一、三四四頁中二七～二八行・『浄全』一、四六頁八行)
- 【補註】
- (補註1) ㊦「答應此決定一向答云要發菩提心方生極樂」、㊧「答云要發菩提心方生極樂」、㊨「答此應決定一向要發菩提心方生極樂」
- (はっとり じゅんけい 学術研究員、佛教大学大学院)

以聞淨土教一往領解判爲佛性何不以此
爲淨土種勿自疑宿善之有無更失往生大
利種子之義略以如斯

第五修因決定者委有六門一總明修因二
別明菩提心三明往生正業四明修行相五
明稱名益六明念分齊

第一總者觀經記云依涅槃經一切善業皆
淨土因麤要有四一修戒爲因遠離十惡修

十善等二修施爲因作井種菓施病醫藥造
像立塔三修惠爲因書寫經卷乃至一偈聽
受讀誦爲他演說四護法爲因守護正法不
謗方等此等能爲一切土因求安樂者宜須
修之鈔畧又云依往生論五門爲因一禮拜門
稱名禮拜阿彌陀佛求生其國二讚歎門讚
彌陀佛光明智慧一切功德三作願門願生
其國修阿彌陀佛所行所成四觀察門觀察

彼國及佛菩薩功德莊嚴五迴向門不捨苦
生所作功德迴以施之共生彼國鈔畧又云依
觀經說明因有四一修觀往生謂十六想觀
二修業往生謂三種淨業三修心往生心有
三種一至誠心起行不虛實心求往二者深
心信樂慙至欲生彼國三迴向發願趣求淨
土及佛所行所成故名爲願狹善迴求故名
迴向此是第三修心往生四歸向往生自雖

無行善友爲說三寶名字或歎佛德二菩薩
德及彼淨土勝妙莊嚴一心歸向故得往生
畧次結歸向云於中或念或禮或歎或稱其
鈔名悉得往生文如法鼓經但知彼方有佛作
往生意得往生也所言三種淨業者經云欲
生彼國者當修三福一者孝養父母奉事師
長慈心不殺修十善業二者受持三歸具足
衆戒不犯威儀三者發菩提心深信因果讀

誦大樂勸進行者如此三事名爲淨業上巳初
其凡法次其二樂後是大樂不其行也由此
應知若大若小若定若散若事若理凡是善
者皆淨土因也第二別明菩提心者問爲但
求生淨土便得往生爲要須發菩提心耶答
應此決定一向答云要發菩提心方生極樂
故觀經疏云嘉祥通論二福十六種觀皆淨土
因別則菩提心以爲業主餘善爲緣云淨影

王

決定往生集

三

大師依雙卷經三輩往生皆云發菩提心又
釋中品文云要由垂終發菩提心種大樂種
方乃得生釋下品文云此人過去曾修大樂
故大經中宣說此人發菩提心已上此名雙卷無量壽經
爲大經一也準此等文要以無上大菩提心爲其往
生之正因耳曇鸞法師往生論註云是故願
生彼安樂淨土者要發無上菩提心也綽禪
師安樂集迹才師淨土論並同此說問其菩

提心者有何相貌耶答依淨影義章發菩提
心總有三種於中最初名相發心此亦有三
一獸有爲心二求無爲心三度衆生心知生
死過患深生獸心名獸有爲聞佛果德發心
趣求名求無爲念諸衆生有苦無樂發濟度
心名度衆生心也問如今所見常沒凡夫但
能樂求五妙境界何能遠及佛功德乎適有
畏苦者唯怖畏三途設有獸五道唯求自度

入心

尺三寸三

二

耳若爾如何發菩提心耶答禪林云人非木
石好自發心云云今云發菩提心甚爲易得所
以者何具因緣故故法花云佛種從緣起此
明聞一乘經發菩提心故云從緣起也一乘
卽是一佛乘佛乘卽是大乘也故知但能聞
大乘經必定優發菩提心也然其發心淺深
重重且論大分則爲三階一相發心如前已
辨二息相發心望前轉深三證發心轉更甚

深此三各有無量淺深故涅槃說四依菩薩
 於八恆佛所發菩提心云云故知發心淺深無
 量然於此中且明最初一念發心謂十信前
 常沒位中遇善知識得聞大乘發一念心隨
 順愛樂適起此心名發道心乃名鄰近善趣
 人也發菩提心義章中十信前明相發心者是也即此世人厭世
 非常欣求淨土是發菩提心也故觀經中韋
 提夫人現迹爲凡此人實大菩薩也遇惡子緣厭捨

決心集

決定生主卷

三三三

娑婆濁惡不善唯求西方下劣淨土但以此
心爲淨土因大師判云發菩提心以爲業主
若爾但是求淨土者卽已得發菩提心也又
若極能畏惡道者卽爲厭離三界六道終皆
退入諸惡趣故又樂淨土卽爲求佛以此樂
求相似道故亦卽願求彌陀國故菩提有三
謂法報應故法華論名三種佛菩提今旣想
念應身應土卽念應佛菩提果也念菩提故

名菩提心觀經疏云嘉祥故雙卷經云十念菩
提爲因得生此之菩提業非但生淨土終至
佛果但衆生聞佛道長遠望崖而退望者見也崖者
高絕故示淨土近果作進趣之緣爲淨土因故
經云易往而無入也畢竟成佛之本故經云
始發菩提心能動無邊生死大海也已上雙卷
一部無有十念菩提爲因之文但本願云至
心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取

正覺下輩文云一向專意乃至十念無量壽
佛云但求淨土但念彌陀大師判爲十念菩
提然下輩文具足之云當發無上菩提之心
一向專意乃至十念念無量壽佛願生其國
云若以十念屬上句者卽如所引十念菩提
爲因生也雖有此意卽以下句念無量壽成
其上句念菩提故故知但以念佛爲發菩提
心耳問觀經疏云若滯慳貪所發勝業不生

淨土唯以一時廣濟之心爲菩提心云鸞師
云若人不發無上菩提心但聞彼國土受樂
無間爲樂故願生亦當不得往生也是故言
不求自身住持之樂欲拔一切衆生苦故安
樂集依淨土論云今言發菩提心者正是願
作佛心願作佛心者卽是度衆生心迦才云
若不發菩提心求出三界作佛直爾念佛求
生西方獨善一身避苦逐樂者此是凡夫念

法然

法然集

卷七

亦不得往生_云今所明義不兼利他何得成
就菩提心耶答智論四十一云菩薩初發心
緣無上道我當作佛是名菩提心是菩提心
與佛相似所以者何因似果故是名無等等
心_云若依此文菩提心者正是願求作佛心
也今願佛土即願作佛故願往生是菩提心
然安樂集云願作佛心即度衆生心者顯相
成義以大悲心爲佛心故若念佛時即念大

悲又迦才云獨善一身避苦逐樂不生淨土
者據逐求樂深心者說如觀經疏滯慳貪業
不生淨土其義一也今不例之但初行人其
心麤淺不能具足廣濟之心然以淨信隨順
大乘一念十念菩提心成又善趣位三心不
等有增減故何況最初相似發心又就事中
由孝養故廣濟心成孝順之心轉至七世亦
於一切衆生皆生慈悲以輪迴生死無非有

王

法然居士集

卷

恩故又如惡人殺一羊時於一切生皆成殺
業一切衆生若作羊者皆應殺故以善準惡
其理亦然一切皆可爲父母故若於父母有
孝順者自然便成廣濟心也稱檀始萌卽有
凌雲之勢慈善纔發乃有大悲之勢也故智
論云第四十九卷知恩者是大悲之本開善業門
法華經云漸漸積功德具足大悲心初心大
悲何必圓滿乎大悲經云何名爲大悲若專

念佛相續不斷者隨其命終定生安樂若能
展轉相勸行念佛者當知此等悉名行大悲
人也_上已又以經論中普攝衆生之文與禮念
合行應由法力自然成悲謂如願其諸衆生
往生安樂國等也讀誦法華皆成佛教卽此
正意三種淨業中第三淨業也問爲唯無所
得發菩提心生淨土耶答嘉祥疏云問爲有
得因生無得因生答二義皆有之_上已羣疑論

瑠璃地

法然徳山集

三七

云問西方淨土是不退處著相凡夫不可得
生須依大樂經中百論等學無所得方可得
生今依觀經觀寶樹等及相好身或稱名號
豈非有所得何得生西方釋若悟畢竟空離
諸分別爲上輩生凡夫在俗不能廣習無所
得觀專念佛故亦得往生九品別故鈔畧綽禪
師云若始學者未能破相但能依相無不往
生云問疏云若但作瑠璃地觀見好淨地則

生貪心以觀地不地故得滅罪云又云若滯
慳貪所發勝業不生淨土云此中云地不地
者卽中道觀卽是無所得義若有所得便滯
貪過何復言通有所得耶答若染汙貪及小
乘心不得往生不簡大乘有所得因若相從
言大乘初心有所得善實是無所得依無所
得教門起故諸大乘教皆無所得以爲宗故
故此觀經亦以不二爲體疏見問若爾初學

參

大

疏

凡夫何成此業耶答西方依正及此教門皆是因緣無礙二諦依此起業成無所得故觀經云若念佛時是心是佛是法界身云云法界即是無生中道此心即是無所得正觀應知世俗凡夫纔起信心受大乘經無所得教念無所得淨土之佛稱名作禮皆成無得由法力故自然成就故涅槃義記云法力熏之冥使滅惑又由願力必得成就故觀經云然彼

如來宿願力故有憶想者必得成就云準此
等文世俗行人設不自知中道法門文義之
相但能念佛德自然成無得如梵天王自作
甘露而不知其味西方行者亦爾自作無所
得而不自知是無所得也相從雖皆是無所
得而世俗人猶帶著相分始異終亦名有得
二義皆有者卽此謂也第三明往生正業者
問已知發菩提心以爲業主未知隨緣所起